

平野秀吉が記した「榮光帖」と

『日本アルプス登山案内記』発行に伴う 登山家高頭仁兵衛・大平晟・榎有恒との 交流を明らかにする

榎田 善 衛

一 はじめに

平野秀吉はこの数年にわたる調査研究により、教育者、国文学者、校歌作詞者としての業績の一端が明らかになりつつある¹²³⁴⁵。業績の一端を紹介すれば、平野が明治二十八（一八九五）年七月十六日発行の『実用文典』（発行者：林平次郎）の三名の著者の一人であったこと、また平野は明治二十八（一八九五）年九月十三日から明治三十三

（一九〇〇）年三月二十二日の約四年六月の間、新潟県尋常中学校（一

年間のみ新潟県中学校と名称変更）に学科「国語」「漢文」「習字」の教員として勤務し、五年間在学した會津八一を教授したこと、さらに平野の相馬御風宛書簡を発見し二人の交流関係を明らかにしたことが挙げられる。また平野は校歌を十七曲作詞しており、そのうち十三曲が新潟県高田師範学校の関係者により作曲されていることも明らかとなった。しかしながら、平野が日本アルプスを登っていたことや登山案内を著したことは既知の事実ではあるが⁶、『日本アルプス登山案内記』がどのような経緯で著され、どのような人物との交流を介して発行されるに至ったのかについて調査研究した事例はみられない。また私は平野の著作（図書）をまとめ、平野秀吉旧蔵品の調査を進めていく過程で、登山時に撮影されたと考えられる写真を納めたアルバム帖『深山と三谷』とアルバム帖を納めている桐箱「榮光帖」の存在を確認することができた。

そこで本研究では、アルバム帖『深山と三谷』とアルバム帖を納めている桐箱「榮光帖」の調査を手がかりとして、平野が著した『日本アルプス登山案内記』の発行に至る経緯を明らかにすることを目的とする。その過程で平野が三名の登山家（高頭仁兵衛・大平晟・榎有恒）と交流関係を結ぶ変遷過程を明らかにするとともに、平野の日本アルプス登山案内者としての業績が明示できると考えている。

二. アルバム帖『深山と三谷』と桐箱「榮光帖」の調査

私は『平野秀吉資料目録』に記された⁷、「榮光帖『深山と三谷』」（大

1 榎田善衛「平野秀吉の偉業と會津八一について」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十六号』越佐文人研究会、2013、pp.48-59。
2 榎田善衛「會津八一と恩師平野秀吉」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十七号』越佐文人研究会、2014、pp.31-44。
3 榎田善衛「平野秀吉と相馬御風の交流」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十七号』越佐文人研究会、2014、pp.45-52。
4 榎田善衛「平野秀吉が作詞した校歌と作曲者小林禮・田中信太郎・小出浩平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十八号』越佐文人研究会、2015、pp.153-173。
5 榎田善衛「平野秀吉が作詞した新潟県立小千谷高等女学校の校歌と作曲者大和田愛羅と校長斎藤秀平」、岡村鉄琴『新潟県文人研究第十九号』越佐文人研究会、2016、pp.148-163。

6 小泉孝「巻町双書 第十七集 平野秀吉」巻町役場1971、pp.69-76。

7 巻町郷土資料館「巻町郷土資料館資料目録No.6 平野秀吉資料目録」巻

正十三年⁸」を調査する機会を得た。平野秀吉が「榮光帖」と天板に墨書した桐箱には、表紙に『深山と三谷』⁹と刺繍が施されたアルバム帖一冊が収まっていた(図1、2)。アルバム帖には五十二頁にわたり、登山時の風景と人物等の写真が貼られていた(表1)。一頁に一枚の写真が貼付され、写真右上の小紙には写真の題名が、左下の小紙には撮影場所及び状況が記されていた(図3、4、表1)。アルバム帖の最終頁には、新潟県知事小原新三(烏兔)¹⁰が料紙一枚に墨書した短歌(俳句)一首が貼付されており、次のとおり読み取ることができた(図5、6)。

町郷土資料館, 1984, p.15。

⁸ 西曆一九二四年。

⁹ 「深山と三谷」の名称は日本山岳会発行の山岳写真集『高山深谷』第一輯(明治四十三(一九一〇)年三月)にちなんでいると考えられる。

¹⁰ 小原新三は「東京府士族小原實の長男として、明治六(一八七三)年三月十三日に生れた。同明治三十(一八九七)年東京帝国大学法科大学政治学科を卒業、貴族院に入つて、三十一(一九一八)年書記官に任ぜられ、内務省参事官を兼任した。四十(一九〇七)年に青森県事務官、四十一(一九〇八)年に奈良県内務部長、四十三(一九一〇)年には朝鮮総督府内務部地方局長等を歴任し、また忠清南道長官、総督府農商工部長官を勤め、大正九(一九二〇)年二月三日には和歌山県知事に栄転した。十二(一九二三)年六月十六日に本県(新潟県)知事に転じ、十四(一九二五)年十月十八日に依願免官となつた。その後愛国婦人会事務総長に就任し、昭和二十八(一九五三)年六月二十七日、八十歳で歿した。従三位勲二等。『行政法汎論』『行政法各論』『警察行政法要議』『地方議会の道義化及地方自治』等の著書がある。(略)。文芸趣味もゆたかな人で、「烏兔」と号して俳句に親み(ママ)、(略)恬淡な洒脱な性格は、世人から好感をもつて迎えられたが、内務大臣若槻禮次郎の慰留をも聞かず、にわかには官界を退いた。(略)」とある。(新潟県議会史編纂委員会『新潟県議会史 大正』新潟県議会, 1957, pp.948-949。)

菊乃香や 名越斥けて 住む夫子 烏兔

(大意) 菊の香りがする季節に(殿下が言うところには)、
名を隠して(床しく)、暮らしているあなた。

(注) 「菊乃香」は秋の季語と皇族の象徴の両方を示す語。

アルバム帖を納める桐箱「榮光帖」の外寸は、間口三十五・四センチメートル、高さ六・〇センチメートル、奥行き二十六・四センチメートルで、印籠箱であった。桐箱の内寸は、間口三十三・〇センチメートル、高さ四・〇センチメートル、奥行き二十四・〇センチメートルであり、横三十二・〇センチメートル、厚さ二・三センチメートル、縦二十三・五センチメートルのアルバム帖が収納できる大きさとなっていた。桐箱天板の裏面には平野秀吉が墨書したいわれがあり、次のとおり読み取ることができた(図7、8)。

大正十三歳次甲子秋十月

摂政殿下統大演習於金澤歸路過高田而
假泊於偕行社焉官民歡呼山河加光會此
帖新成乃憑縣当局之手象入

殿下臺覽事畢縣知事小原氏為賦

短詩一章題卷後以錄余光榮

秀吉識

(大意) 大正十三(一九二四)年十月に摂政殿下¹¹が金沢で大演習を実施した帰路、高田の偕行社¹²で仮泊したため、官民が歓呼して迎えた。山河加光会がこのアルバム帖をつくり、県当局に手渡した。殿下は偕行社でこれをご覧になった。そのため巻末に貼付し、身に余る光栄として記録した。たため巻末に貼付し、身に余る光栄として記録した。

〔注〕「臺覧^{たいらん}」は皇族が観覧することを敬つていう語。

撮影場所からは、白馬岳、黒部峡谷、針の木峠、大黒鉾山、白馬大雪溪、飛驒の平湯、祖母谷温泉、徳本峠、白馬乗鞍岳、木曾駒ヶ岳、立山、白馬岳葱平、白馬天狗小屋、上高地大正池、立山ザラ峠、浄土山などの地名を確認することができた(表1)。このことから平野は北アルプス、中央アルプスの山々に登っていることが明らかとなった。桐箱「榮光帖」の天板裏面のいわれによれば、摂政殿下(後の昭和天皇)がアルバム帖『深山と三谷』の写真を台覧したことが記されていた。平野は大正十三(一九二四)年頃には、登山家として地方で知られた存在であることが明らかとなった。

三、『日本アルプス登山案内記』の発行

平野秀吉の著作(図書)を整理する過程で、著書『日本アルプス登山案内記』が重版されていることに気が付いた。入手した四冊の『日

¹¹ 後の昭和天皇。

¹² 将校の集会所。(上越市史編さん委員会『上越市(普及版)』上越市,1991,p.220)

本アルプス登山案内記』の奥付を参考に、①書名、②定価、③印刷・発行年月日、④序文著者名、⑤著作者名、⑥発行者名、⑦印刷者名、⑧発行所名、⑨販売所名等について、年代順にまとめることにした。

(一) 第一冊目

①日本アルプス登山案内記附歌集駒草、②定価金壹圓八拾錢、③昭和二年¹³六月十五日印刷・昭和二年六月二十日発行、④記載なし、⑤平野秀吉、⑥宮部富三郎(東京市神田區紅梅町十三番地)、⑦時枝佳實(東京市神田區雉子町三十四番地)、⑧斯文書院(東京市神田區紅梅町一三)、⑨記載なし。

(二) 第二冊目

①日本アルプス登山案内記、②定価金壹圓參拾錢、③昭和四年¹⁴十月十日印刷・昭和四年六月十五日発行、④記載なし、⑤平野秀吉、⑥宮部富三郎(東京市神田區紅梅町十三番地)、⑦時枝佳實(東京市小石川區關口水道町四六)、⑧斯文書院(東京市神田區紅梅町一三)、⑨記載なし。

(三) 第三冊目

①日本アルプス登山案内記、②定価金壹圓參拾錢、③昭和四年六月十日印刷・昭和四年六月十五日発行・昭和四年六月三十日再版発行・昭和四年六月三十日四版発行・昭和四年七月三日五版発行、昭和四年七月五日六版発行、昭和四年七月十日七版発行、昭和四年八月一日八版発行・昭和四年八月二十日九版発行・昭和四年九月一日十版発行。

¹³ 西曆一九二七年

¹⁴ 西曆一九二九年。

昭和五年¹⁵五月十日五年版第一版、④記載なし、⑤平野秀吉、⑥宮部富三郎（東京市神田區紅梅町十三番地）、⑦時枝佳實（東京市小石川區關口水道町四六）、⑧斯文書院（東京市神田區紅梅町二三）、⑨田口書店（東京市神田區表神保町二）。

（四）第四冊目

①日本アルプス登山案内記、②賣價金壹圓、③昭和六年¹⁶五月二十日六年版印刷・昭和六年五月二十五日六年版発行、④高頭仁兵衛、⑤平野秀吉、⑥宮部富三郎（東京市神田區紅梅町十三番地）、⑦記載なし、⑧記載なし、⑨發賣者 田口穰・發兌 田口書店（東京市神田區表神保町）。

これまでの記載内容をまとめると次の四点に集約される。

（ア）書名について。第一冊目の昭和二（一九二七）年六月二十日発行の書名は『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』とあるが、第二冊目の昭和四（一九二九）年六月十五日発行の書名は『日本アルプス登山案内記』とされた。正式な書名は昭和四年（一九二九）以後、『日本アルプス登山案内記』に変化したことが明らかとなった。

（イ）定価について。第一冊目〔昭和二（一九二七）年六月二十日発行〕の定価は一円八十銭であったが、第二冊目〔昭和四（一九二九）年六月十五日発行〕は一円三十銭と第一冊目に比べ五十銭安くなり、第三冊目〔昭和五（一九三〇）年五月十日発行〕は第二冊目と同値であった。第一冊目〔昭和二（一九二七）年六月二十日発行〕の『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』は「歌集駒草」が付けられている

たが、第二冊目〔昭和四（一九二九）年六月十五日発行〕では除かれ、頁数が減少した¹⁷。それに伴い定価が下がったものと考えられる。第四冊目〔昭和六（一九三二）年五月二十五日発行〕は定価が売価に代わるとともに、第三冊目〔昭和五（一九三〇）年五月十日発行〕に比べ三十銭安い、一円となった。これは多部数の販売を見込んで、売価を安く設定したものと考えられる。

（ウ）重版について。第三冊目の奥付によれば、第二冊目が発行した昭和四（一九二九）年六月十五日の二カ月半後の九月一日時点で十版を数えている。翌年の昭和五（一九三〇）年五月十日には五年版の第一版を、翌々年の昭和六（一九三二）年五月二十五日には六年版を矢継ぎ早に発行している。

（エ）著作者と序文著者の併記について。第四冊目〔昭和六（一九三二）年五月二十五日発行〕から、著者平野秀吉の他に序文著者として高頭仁兵衛の名が併記されるようになった。これは高頭の名が山岳関係者のみならず社会的に認知されるようになったためだと考えられる。併記することで販売が促進されたことが推察される。

四．高頭仁兵衛が記した『日本アルプス登山案内記』序文

高頭仁兵衛の序文は、昭和二（一九二七）年六月二十日に発行した著書から添えられている。高頭は序文を著すに至った経緯を次のとお

¹⁷ 昭和三（一九二八）年十月二十日に『山嶽歌集 駒くさ』として、斯文書院から定価七十五銭で出版されている。挿絵「駒草」は山本春舉による。

山本は大正三（一九一四）年に日本山岳会へ入会している。（日本山岳会百年史編纂委員会『日本山岳会百年史〔続編・資料編〕』日本山岳会、2007、p. A195°）

り記している¹⁸。

日本山岳會の名譽會員の大平晟氏は自分の恩師であります。恩師の恩知己に平野先生と申す御方がおありでありまして、和歌が御好きで兼ねて山岳登攀家で、高田市に御在任の由を承りまして、自分は親しく先生を御訪問致し、その高風に接したいと思ひながら、雑用俗事に追はれまして、その意を果さずに四五年を過ぎました、ところが望外にも昨年の秋に、先生から御尊書が参りまして、先生の御詠草の山岳歌集を拝見いたすことが出来ました。本年に入りまして先生から御通信が有りまして、詠草と案内記を一括して出版するから、何か書けと云ふ御下命で御座いました。同時に案内記の御玉稿も落掌いたしました、(略)。昭和二年四月二十六日 日本山岳會 幹事 高頭仁兵衛(式) 謹記

平野秀吉は高頭との知遇を、平野と旧知の中である大平晟を通じて得たことが明らかとなった。高頭が序文を記したのが昭和二(一九二七)年四月二十六日であるため、高頭が平野を「訪問し高風に接したい」と考えていたのは昭和二年(一九二七)の四から五年前、すなわち、大正十一(一九二二)年から十二(一九二三)年であると考えられる。大正十二(一九二三)年八月は、平野が『萬葉集全訳』の第一次原稿を脱稿した時期に当たる¹⁹。

¹⁸ 平野秀吉『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』斯文書院1927、p.1(横田野線引)。

¹⁹ 前掲5、p.163。

序文中で「昨年の秋」に平野から手紙を受け取り、「山岳歌集」を見たことと記されていることから、「昨年の秋」とは大正十五(一九二六)年の秋、九月十一月頃と考えられる。

さらに序文中で高頭は「本年に入りまして先生から御通信が有り」とあることから、通信を受けた時期は昭和二(一九二七)年一月以降と考えられる。平野は詠草(歌集)とアルプス登山案内記を一括して出版することを計画し、日本の山岳に詳しい高頭に、出版に当たって序文等を著してもらいたい旨を伝えている。「御玉稿も落掌」とあることから案内記の原稿が高頭の手元にあつたことが考えられる。

これまでの記載内容をまとめると次の三点に集約される。

(ア) 平野秀吉が高頭仁兵衛と知遇を得たのは、大平晟を介してである。
(イ) 高頭仁兵衛が平野秀吉を認識しはじめたのは、大正十一(一九二二)年から十二(一九二三)年頃にかけてである。

(ウ) 平野秀吉は高頭仁兵衛宛に手紙を、少なくとも二回(大正十五(一九二六)年の秋、昭和二(一九二七)年一月以降)を出している。一回目は山岳歌集、後の「歌集駒草」の草稿を、二回目はアルプス登山案内記、後の『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』の草稿を添えており、二回目は『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』発行に当たつての序文の執筆依頼のためである。

五. 高頭仁兵衛の人となり

『日本アルプス登山案内記』序文の著者高頭仁兵衛について、次に示したい。高頭仁兵衛の略歴を示した文章は数編存在するが、ここではそのうち六編について出典年代に従つて示す。なお次の(一)(二)(三)

(六) は高頭仁兵衛の略歴を知る上で価値があると考えたため本文を記した。

(二) 昭和十一(一九三六)年四月二十五日発行『越佐と名士』²⁰

新潟縣三島郡深才村。當家は由緒ある名門にして祖先以來代々甲斐武田家の舊臣であつた。武田勝頼薨るに及び主君を失ひ、去りて信州高遠の地に住した、依つて高遠の氏を稱した。次いで現地に居を定め豪族として近郷に畏敬され、領主牧野長岡藩主(ママ)特に高頭の姓を賜はつたと傳へられる。氏は明治十年²¹五月生れ、前名式太郎を改め襲名した。小學校卒業後東京に出て三島中洲に師事し二松學舎に漢學を専攻した。二十一歳頃より山岳研究を志し、直ちに富士の靈峰に登攀し、翌年苗場、八海兩山を征服し、爾來信越、濃、飛の高山並びに臺灣新高山をも究めた。先に日本山岳會を組織して其の會長となり、機關雜誌「山岳」を發行し、また大著「日本山岳誌」²²を世に送り、山岳研究の開山として一世に其の名を謳はれた。著書に前記「日本山岳誌」²³の外「日本太陽曆年表」「御國の咄し」等がある。新潟縣多額納稅者。

【家庭】夫人レイさん(明治二二生) 新潟縣市島德則氏令姉。嗣子當五郎氏(明治二八生) 父仁兵衛氏五男、同夫人アツさん(明治三三生) 同縣田邊正胤氏長女、同長男晃一氏(大正九生)、同二男芳夫氏(大正一一生)、同三男壽久氏(大正一三三生)、同四男英夫氏

同20。

西曆一八七七年。

嶽志が正しい。

同22。

(昭和二生)、同長女詰さん(昭和四生)。

(二) 昭和十一(一九三六)年四月二十五日発行『越佐名士録』²⁴

内容は前記(一)の「新潟縣三島郡深才村(略)新潟縣多額納稅者。」と同じ。なお【家族】が省略され、代わつて「趣味 讀書。」の記載がある。

(三) 昭和十二(一九三七)年十一月三日発行『三島郡誌』²⁵

山嶽會の創立者「太陽曆年表」「御國の咄し」の著者である。明治十六年²⁶の頃深澤小学校に入學、次で片貝高等小學校へ入學、二十四年²⁷卒業、爾來東部に出て、中州(ママ)三島の二松學舎に學び、傍ら皇典講究所に學んだ、氏の山嶽會創立の動機は日本山嶽志の編纂に基してゐる、而して日本山嶽志²⁸の編纂素志の一面は三島中州の序文之を盡してゐる。

高頭君、名式、稱仁兵衛、越後國三島郡富豪也。十數年前在余門、年尚幼、羸弱善疲、如不堪業者、(中略) 曰、弟常歎羸弱以生、不若過死、偶讀某書、曰、塙保己二有宿痾、周遊天下三年、始全癒、大有感焉、自此有暇則事遊步、而水有汽船、陸有火輪、人馬之車、疲倦則乘、無復遊步之効、於是起登山之志、自富士筑波、至近郷八海諸高山、莫不盡登攀、而山嶽無車船可以醫疲倦、疲倦之極、達嶺巔而憩、愉快不可言、加之眺矚可以資地理之學、探訪可以資鑛石動植之學、如此十年、羸弱變爲強壯、蓋亦遵先生教訓

24 坂井新三郎『越佐名士録』坂井新三郎,1936,pp.446-447。

25 近藤勘治郎『三島郡誌』三島郡教育委員會,1937,p.1066。

26 西曆一八八三年。

27 西曆一八九一年。

28 誌ではなく志が正しい。

之効也、又何暇入政黨營新業、而先業亦益増殖、幸慰高懷、余深
喜豫戒之徒也。(下略)

世に名山高嶽に登つた時の氣持爽快のものはあるまい、雄壯の氣、
剛健の質は不言不語の間にはぐくまれる。氏が山岳會を組織した所
以も、また其處に存するのであらう。然も氏は私財を投じて少しも
惜しむ處なく、眞に我山岳研究の爲に一身を捧げたのであつた。

(四) 昭和四十七(一九七二)年五月二十五日発行『越佐人物誌中
卷』²⁹

「三島郡誌」を出典として記されているため、省略する。

(五) 昭和五十一(一九七七)年十月二十五日発行『新潟県民百科
事典』³⁰

記載の重複をさけるため、省略する。

(六) 平成十(一九九八)年三月三十一日発行『ふるさと長岡の人々』³¹

明治十年(一八七七)五月二十日、三島郡深沢村(長岡市)

に清蔵義宗の二男として出生。幼名式
太郎。

明治二十二年(一八八九)初めて弥彦山登山。片貝高等小学校卒業。

明治二十五年(二八九二)秋、煙火製造中右手・両眼傷。

明治二十七年(二八九四)春、眼の治療のため上京。

明治二十八年(二八九五)二松学舎入学。

明治二十九年(二八九六)九代目仁兵衛を継ぐ。

明治三十年(一八九七)富士山・八海山・苗場山登山。十一月

北蒲原郡の豪農市島徳次郎二女レイ子
と結婚。

明治三十八年(一九〇五)十月日本山岳会結成。

明治三十九年(一九〇六)「日本山嶽志」自費出版。

大正二年(一九一三)世界一周觀光團参加。

大正九年(一九二〇)「日本太陽歴年表」刊行。

大正十四年(一九二五)「御国の咄」刊行。

昭和三年(一九二八)台湾新高山登山。

昭和八年(一九三三)日本山岳会第二代会長。

昭和十年(一九三五)同会名誉会員。

昭和十八年(一九四三)戦争で帰郷。

昭和二十五年(一九五〇)弥彦山頂に寿像建設³²。

昭和三十三年(一九五八)四月六日、死去。

高頭仁兵衛は明治十年(一八七七)五月二十日、三島郡深沢村(長
岡市深沢町)五九番戸で生まれた。幼名は式太郎。藩制時代からの
豪農で高頭家は代々仁兵衛を名のつた。

学究肌の家系で、当時県内で貴族院議員の互選資格を持つ、十五人
の中の一人であつた祖父から儒学や仏教を学び、多芸多趣味であつた
祖母田穂から茶道や礼法・漢文・漢詩・俳句・和歌・謡曲を習得した。

³² 高頭仁兵衛翁壽像建立芳名録(昭和二十五(一九五〇)年十一月末)に
「東京本部」として「横有恒」の名がみえる。(日本山岳会越後支部「高頭仁
兵衛翁壽像建設報告」日本山岳会越後支部「越後山岳第四号」日本山岳会
越後支部、1955,pp.15-16)

深沢小学校³³、片貝高等小学校を経て二松学舎に学ぶかたわら、皇典講習所^{てんこうしゅうじょ}で国学、漢学を学んだ。また文学書を好み伝記や物語、講談なども乱読した。生来虚弱な体質であったが、塙保己一^{はなわほきいち}伝を読んだことから、片貝までの往復十二キロの歩行で健康を取り戻した。片貝高等小学校で高山峻嶺^{しゅんれい}の先駆者大平晟^{あむらち}と出会い、小旅行を体験する。十三歳で弥彦山を登り、県境に連なる山岳の景観に感動して登山の趣味を体得した。十六歳の秋に趣味の煙火製造^{はなび}中誤って右手と両眼を負傷、これが人生に大きく影響することになる。

明治二十九年（一八九六）春、実父の死去に伴い九代目仁兵衛を継ぎ、義明^{よしあき}を名のつて本名を式^{しき}、号を海峰と称した。高頭家の習慣に従い、この日の夕食の膳から徳利が付いたという。三十三年³⁴五月の徴兵検査は身体不足で不合格。八月に富士山、苗場山に登山。これから全国の山岳踏破が始まる。

この年の十一月、北蒲原郡天王寺村（北蒲原郡豊浦町）の越後一の豪農市島徳次郎の二女レイ子と結婚する。両家の縁談の契機については知る由もないが、渋海川を船で運ばれた衣粧収納用に三階建ての土蔵が新築され、人力車を仕立てた花嫁の行列は長岡駅から延々と続いたという。また、裏一ノ町のしにせ肴屋高久^{さかなやたかひさ}が、食材や料理人を派遣した豪華な祝宴は一週間も続いたという。

³³ 現、長岡市立深沢小学校。校歌は昭和十一（一九三七）年三月二十六日に制定され、作詞は平野秀吉、作曲は岩井清志（高田師範学校音楽担当教員）、制定時の校長は岸勝二（二六代目）である。（深沢小学校百周年記念事業実行委員会『百周年記念誌 あしあと』深沢小学校百周年記念事業実行委員会 発行、1972.p.19）

³⁴ 「三十三年」ではなく「三十年」の誤り。

登るごとに登山に興味が増し、険阻な山とされていた八海山登山で、母に登山を禁止されたことから、不満を晴らすために、高頭は金と暇を山岳研究に注ぐ。山に関する書物を買って求め、古老や山に登る人を探して話を聞き、陸軍の陸地測量部を訪ねて山の位置や標高を確かめたりした。地味で堅実な行動力で、およそ六年の歳月をかけて、我が国で初めて山岳辞典を兼ねた案内書『日本山嶽志』三〇〇〇部を自費出版した。同郷の博文館主大橋新太郎の協力もあつたが、当時の米価にして三〇〇石相当の出費により、一個人が出版したのは極めて異例で、同書は今日でも山岳人の座右の書となっている。このほか『日本太陽暦年表』上・下巻、『御国の咄』^{はなご}を刊行。山嶽志の姉妹編ともいえる『日本河川誌』は未完となったが、その一部は会報「山岳」に登載されている。

この当時、日本山岳会創立の機運があつた。山嶽志の編さんで同郷の大竹貫一の紹介で『日本山水論』の著者志賀重昂^{しげたか}を訪れた際、そこでイギリス人宣教師ウエストンが山岳会の設立を勧めていた日本アルプス探險家の小島烏水^{うづみ}を知る。高頭は日本山岳会設立発起人の一人に加わり、明治三十八年（一九〇五）十月、本郷の富士見楼で本邦初の山岳会が誕生する。下級官吏の月俸が十五円という時代に、年会費一円で入会者の予想のつかない山岳会に、高頭は①山岳会会計に欠損がある場合、向こう十年間、毎年一〇〇〇円を提供する。②万一の場合を考慮し、山岳会を受取人に養老保険一万円に加入担保する、と約束する。設立発起人中ただ一人、地方の豪農であつた高頭の後ろ盾により日本山岳会は発足した。創立当時の会員は一六人で事務会計が成り立つはずはなく、すべて高頭がしかるべく処理したのである。このことは長くだれにも知らされずにいた。

昭和八年（一九三三）、第二代日本山岳会長に就任、同十年に名誉会員に推された。「登山狂い」で先代からの家産を傾けたと世間にいわれたが、山への情熱と山岳研究に生涯をささげ、日本を代表する社団法人日本山岳会を育て、登山を国民的スポーツに発展させた先達で、高頭のまいた一粒の種が大きな花をつけ、越後長岡は山岳会の聖地として、多くの岳人が深沢町を訪れている。（室賀輝男）。

高頭仁兵衛の人となりをもとめると次の六点に集約される。

(ア) 高頭仁兵衛は明治十（一八七七）年五月二十日、三島郡深沢村（長岡市）に生まれ、本名式しよく。明治二十九（二八九六）年春、豪農高頭家を継ぎ、九代目仁兵衛となる。ちなみに高頭は平野秀吉の四歳年下³⁵である。

(イ) 高頭仁兵衛は明治二十二（一八八九）年に弥彦山、同三十（二八九七）年に富士山・八海山・苗場山、昭和三（一九二八）年に台湾新高山を登山した。

(ウ) 高頭仁兵衛は『日本山嶽志』（明治三十九（一九〇六）年）出版、『日本太陽歴年表』（上巻・下巻）（大正九（一九二〇）年）、『御国の咄』はな（大正十四（一九二五）年）を刊行。

(エ) 高頭仁兵衛は明治三十八（一九〇五）年十月日本山岳会（現、公益社団法人日本山岳会）を同志ともに発起、昭和八（一九三三）年日本山岳会第二代会長に就任、同十（一九三五）年日本山岳会名誉会員に推された。

³⁵ 平野秀吉は「明治六（一八七三）年六月五日」生まれ。（小泉孝『巻町双書 第十七集 平野秀』巻町役場、1971, p.1.）

(オ) 高頭仁兵衛は片貝高等小学校（現、小千谷市立片貝小学校）時代に大平晟の影響で登山趣味を覚えた。

(カ) 高頭仁兵衛の寿像が昭和二十五（一九五〇）年に弥彦山頂に建設。

六、大平晟の人となり

『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』序文の著者高頭仁兵衛の恩師大平晟について、次に示したい。大平晟の略歴を示した文章は数編存在するが、ここではそのうち五編について出典年代に従って示す。なお（一）と（五）は大平晟の略歴を知る上で価値があると考えたため本文を記した。

(一) 昭和四十二（一九六七）年十二月十五日発行『小千谷市史 本

編 下巻』³⁶

片貝村高梨の人おわだいらあきら大平晟（慶応元（昭和十八））は、新潟師範学校卒業後四二年片貝小学校・高梨小学校の訓導・校長として郷土子弟の教育に生涯を捧げたが、少年のころから登山を愛し、「県下は勿論、富岳・立山・白山の三名山を始め、北は樺太・北海道より、南は朝鮮・台湾に及び、皇国景勝の名山溪谷遍く足跡を印せざる無し」というほどであった。大正八年日本山岳会名誉会員に推薦され、その古希の寿像が苗場山々頂に建てられた。日本山岳界の草分け的存在であった。

(二) 昭和四十七（一九七二）年一月二十五日発行『越佐人物誌 上

³⁶ 小千谷市史編修委員会『小千谷市史 本編 下巻』新潟県小千谷市、1967, p.528（横田野線引）。

『小千谷市史下巻』を出典として記されているため、省略する。

(三) 昭和五十二(一九七七)年一月一日発行『新潟県大百科事典』³⁸

記載の重複をさけるため、省略する。

(四) 昭和五十二(一九七七)年十月二十五日発行『新潟県民百科

事典』³⁹

記載の重複をさけるため、省略する。

(五) 平成二十三(二〇一一)年三月三十一日発行『ふるさとかがやく小千谷の先人』⁴⁰

大平晟は、日本の山岳界の草分けとして知られています。晟は

一八六五(慶応元)三島郡片貝村高梨(現在の高梨町)に生まれ

ました。幼名は友三郎といいました。その後一八七二年(明治五)公立小学校鴻巣校こうのすに入学しました。

晟が山と出会ったきっかけは一八七九年(明治十二)、十四歳の時のことでした。友人二人とともに柏崎の米山に登りました。鴻巣から徒歩で三日間かけて歩きとおしたそうです。これが晟にとつての、初めての登山でした。これ以降、すっかり登山の魅力に取りつかれた晟は、全国各地をまわり、登山を続けました。また、登山のスタイルが確立する以前の時代でした。

後に語ったことによれば、「県下はもちろん、富岳、立山、白山

37 前掲39, p.183。

38 新潟日報事業社『新潟県大百科事典』上巻・新潟日報事業社, 1977, p.207。

39 前掲30, p.141。

40 小千谷市教育委員会生涯学習スポーツ課『ふるさとかがやく小千谷の先人』小千谷市教育委員会生涯学習スポーツ課, 2011, p.13 (横田野線引)。

の三名山を始め、北は樺太、北海道より、西南は朝鮮、台湾に及び、皇国景勝の名山溪谷遍く足跡を印せざるなし。」として、日本国内の主だった山はどれも登山したと言っています。また、当時の日本の支配下にあった樺太(サハリン)、朝鮮半島、台湾にまで足を延ばして登山を行うなど、日本の山岳界の開拓者として生涯一六も

の山々に足跡を残しました。

晟は一八八六年(明治十九)新潟師範学校(学校の先生になるための学校)の中等科を卒業し、高梨小学校に勤めましたが、卒業直前に水害で自宅を流され、高梨小学校も被害を受けたため、翌年⁴¹

からは片貝小学校に移り、以降、四十二年間、片貝、高梨の両小学

校に勤めました。一八九七年(明治三十)には片貝高等小学校長に

就任しました。このころの教え子には日本山岳会を創設した長岡市深才出身の高頭仁兵衛たかとうにへいゑがいます。高頭は長岡の裕福な家庭に育ち

ましたが、晟と出会ってからすっかり山の魅力に取りつかれました。

一九一四年(大正三)五十歳のときに高梨小学校長になり、

一九二四年(大正十三)の退職まで勤めました。一九一五年(大正

四)には長年勤めていた片貝小学校の同窓生一同から、自宅の近く

に二〇〇坪の園芸地「楽天園」らくてんえんを贈られます⁴²。

一九一九年(大正八)日本山岳会名誉会員に推されました⁴³、そ

41 明治二十(一八八七)年。

42 「謝恩會」によれば、高頭は「私等二十餘名が發起人」となり、大平晟のために尽力したことが記されている。(高頭義明「大平晟先生と不肖義明」、日本山岳会越後支部『越後山岳創刊号』日本山岳会越後支部, 1988, p.5)

43 「名誉会員に推薦す」で名誉会員に推薦された経緯が記されている。(高頭義明「大平晟先生と不肖義明」、日本山岳会越後支部『越後山岳創刊号』日

の後七十歳を記念して晟の像が苗場山頂に建てられました⁴⁴。登山界の恩人とも言われた晟は一九四三年（昭和一八）に亡くなりまし
た。今でも毎年十一月には苗場山頂で「碑前祭」が行われています。
晟の山に対する言葉に「登山者の憲法は、大胆小心なるにある」と
いうものがあります。今にも通じる登山のルールを作り上げた一
人であるのはまちがいありません。晟の登山紀行は多く残されてい
て『中越探山紀行』・『登山用心録』・『突貫紀行』などが残されて
います。

大平晟の人となりをまとめると次の七点に集約される。

(ア) 大平晟は慶応元（一八六五）年、三島郡片貝村高梨（小千谷市）
に生まれた。ちなみに大平は平野秀吉の八歳年上⁴⁵である。

(イ) 大平晟は明治十二（一八七九）年に米山（現、新潟県柏崎市）
に登山し、以来、当時の日本の支配下にあつた樺太（サハリン）、
朝鮮半島、台湾まで足を延ばし登山。生涯百十六の山々に足跡を残
す。

(ウ) 大平晟は明治十九（一八八六）年新潟師範学校中等科を卒業。
同年に高梨小学校、明治二十（一八八七）年に片貝小学校に移り、

本山岳会越後支部1948,pp.8-9)

⁴⁴ 「恩師大平晟の壽像に題す」によれば、昭和十（一九三五）年初夏、高
頭が日本山岳会会長のとき大平晟の壽像碑の撰文と謹書を行ったことが記さ
れている。（高頭義明「大平晟先生と不肖義明」、日本山岳会越後支部「越後
山岳創刊号」日本山岳会越後支部1948,p.3）

⁴⁵ 平野秀吉は「明治六（一八七二）年六月五日」生まれ。（小泉孝『巻町
双書 第十七集 平野秀』巻町役場,1971,p.1）

以後四十二年間、片貝、高梨の両小学校に勤務。同二十（一八九七）
年に片貝高等小学校長、大正三（一九一四）年に高梨小学校長に就
任し、同十三（一九二四）年に退職。
(エ) 大平晟は大正八（一九一九）年に日本山岳会名誉会員に推さ
れた。

(オ) 大平晟は登山紀行として『中越探山紀行』・『登山用心録』・
『突貫紀行』などを記す。なお、略歴を示した文章には記載がみら
れないが、『日本山嶽志』⁴⁶の「登山術」で「登山の心得」を著す。

(カ) 大平晟の片貝高等小学校（現、小千谷市立片貝小学校）時代の
「教え子に高頭仁兵衛がいる。」

(キ) 大平晟の古希壽像が苗場山頂に建設。

七. 『日本アルプス登山案内記』の「畏くも本書は」の頁挿入と榎有恒
私は『日本アルプス登山案内記』の中に「畏くも本書は」に続く文
章を発見した。これは昭和四（一九二九）年六月十五日発行の『日本
アルプス登山案内記』から表題の次頁に、新しく一頁を設け挿入され
ている⁴⁷。詳細は次のとおり。

畏くも本書は

秩父宮殿下

昭和二年八月、日本アルプス御登山に際
し、島々に於て御案内榎氏より本書を献
上し、御嘉納を忝し山中の殿下を、お慰

⁴⁶ 高頭式『日本山嶽志』博文館1991,登山術pp.42-48。

⁴⁷ 平野秀吉「日本アルプス登山案内記」斯文書院1929,前付（榎田野線引）。

め申した光榮を有するものであります。

これによれば、秩父宮殿下が昭和二（一九二七）年八月に日本アルプスを登山した際に、案内者の榎氏が本書を献上し、山中で秩父宮殿下から読んでいただいたことが記されている。

榎氏とはだれであろうか。公益社団法人日本山岳会の公式ホームページの年表・発起人・歴代会長に基づき、秩父宮殿下と榎（苗字）が記載されている箇所を挙げることにした⁴⁸。

年表

- 一九二二年（大正 十） 九月 榎有恒アイガー⁴⁹（三九七〇m） 東山稜初登。
- 一九二五年（大正 十四） 七月 榎有恒らマウント・アルバータ⁵⁰（三六二〇m） 遠征。
- 一九二六年（大正 十五） 八月〜九月 秩父宮殿下スイスアルプス十数峰を登る。
- 一九二八年（昭和 三） 秩父宮殿下英国山岳会名誉会員に推挙される。

一九四四年（昭和 十九） 五月七日

木暮理太郎の急逝に伴い榎副会長が会長を代行。

一九四六年（昭和 二十） 二月三日

常任役員会にて榎会長の辞任を受理。

一九五〇年（昭和 二十五） 四月

秩父宮殿下他七名、名誉会員に推挙。

一九五一年（昭和 二十六） 四月

榎有恒 会長に就任。

一九五六年（昭和 三十一） 二月〜六月

第三次マナスル登山隊（榎有恒隊長）を派遣。

一九五六年（昭和 三十二） 五月九日

マナスル⁵¹（八一六三m）初登頂に成功。

一九九〇年（平成 二） 五月十七日

榎有恒元会長日本山岳会葬。

二〇一六年（平成 二十八） 七月

マナスル初登頂六十周年および国民の祝日「山の日」施行記念事業。

二〇一七年（平成 二十九） 十月

第一回榎有恒碑前祭を行う（北九州支部）。

⁴⁸ 公益社団法人日本山岳会「歴史・年表・年表・発起人・歴代会長」、『日本山岳会（こころ）』：<https://jacl.or.jp/about/2019071447.html> (2019/8/10 閲覧)。

⁴⁹ スイスを代表する山。
⁵⁰ カナダのジャスパール公園内、アサバスカ川渓谷上流部に位置する山。

⁵¹ ネパールの山。

歴代会長

榎 有恒 Maki, Yuko

一四四四⁵²～一四四六⁵³

榎 有恒 Maki, Yuko

(第四代目)

榎 有恒 Maki, Yuko

一九五一⁵⁴～一九五五⁵⁵

(第七代目)

このことから、榎氏とは第四代目、第七代目と日本山岳会会長を務めた、榎有恒であることが明らかとなった。『わたしの山旅』の「殿下の日本アルプスご登山」によれば、「昭和二年（一九二七）の夏、秩父宮殿下にお伴して日本アルプスに登った。徳本峠を越えて上高地に入り、西穂高、奥穂高、北穂高、槍、小槍、笠ヶ岳、浦田、平湯、高山という行程であった」とある⁵⁶。昭和二（一九二七）年八月に秩父宮殿下は榎有恒と連れ立って、日本アルプス登山に出かけたことが明らかとなった。なお日本山岳会のホームページ⁵⁷や『日本山岳会百年史〔本編〕』⁵⁸『日本山岳会百年史〔続編・資料編〕』⁵⁹について、昭和二（一九二七）年八月の秩父宮殿下の日本アルプス登山に関する記

52 昭和十九年。

53 昭和二十一年。

54 昭和二十六年。

55 昭和三十年。

56 榎有恒『わたしの山旅』岩波書店,1968,p.147。

57 同48。

58 日本山岳会百年史編纂委員会『日本山岳会百年史〔本編〕』日本山岳会,2007,pp.100-103。

59 日本山岳会百年史編纂委員会『日本山岳会百年史〔続編・資料編〕』日本山岳会,2007,pp.A5-A27。

載を見つけることができなかった。

榎有恒の人となりを示した文章は数編存在するが、うち二編を年代順に示す。なお二編はいずれも郷土資料であり、榎有恒の略歴を知る上で価値があると考えたため本文を記した。

(一) 昭和十一（一九三六）年四月二十五日発行『越佐名土録』⁶⁰

横濱市神奈川區南輕井澤四三。山岳家榎有恒の名は日本的といふよりもむしろ世界的に名高い。五尺を出たか出ぬかと思はれるような短軀で演壇に立つ時など、「私はこれでも立つてゐるのですが……」などと洒落るくらゐだが、膽大健脚、大正九年アルプス、アイガーなる前人未踏の山稜を征服して、歐山の山岳家を驚倒させた。而して「ヘルマキ」の名は未だにアルプス界隈の人の記録に残り、當時東京日々に寄稿した登攀記の名文は幾多青年の血を沸かしめたものである。

後東日主催のカナヂアン、ロッキー征服にも亦成功して、北米にもその英名を轟かせた。先年立山において遭難したが、幸ひにも命拾いをなし、山岳界の権威として高貴の御案内などには必ず御名を拝してゐる。

現に鹽水港製糖（株）取締役兼人事課長として令聞がある。

(二) 昭和十一（一九三六）年四月二十五日発行『越佐と名土』⁶¹

内容は前記（一）の「横濱市神奈川區（略）御名を拝してゐる。」と同じ。「現に」以降の記載が異なる。具体的には「現に叔父哲氏

60 同20。

61 前掲20,p.355。

が社長である鹽水港製糖會社に勤め、父武氏は磐城炭鑛その他の重役、令兄智雄氏は慶應大學教授で一門榮達は人の美むところである。」となる。

榎有恒の出身について考察を加えたい。榎武の【家族】の欄に⁶²、榎武の「二男有恒氏（明二七、二生）慶應法律科卒。世界的登山家。昭和二年八月秩父宮殿下スエズ、アルプス御登破御先導役を承はる」とある。ちなみに父武は「長岡藩士榎小太郎氏の長男にして、榎哲氏の令兄である。文久元年七月出生、明治三十七年家督を相續した。長岡中學校を経て、明治十九年慶應義塾を卒業し、（略）。現に鹽水港製糖株式會社監査役の任に在り、（略）」とあり⁶³、榎有恒の父武は長岡藩士榎小太郎の長男であることが明らかとなった。榎有恒の祖父が長岡藩士であつたことから、高頭仁兵衛とは長岡藩でつながっているといえる。

次に榎有恒と高頭仁兵衛の直接的な関わりについて示したい。榎が『越後山岳第四号』で記した「高頭仁兵衛氏を見舞う」⁶⁴から引用する。

昨年の年次晩餐會の席上と後の理事会に於て高頭氏が近来健康を害しておられる故、松方兄と小生とで見舞いに行くようにとのこと

⁶² 前掲30, p. 353 (榎田野線引)。

⁶³ 同62。

⁶⁴ 榎有恒「高頭仁兵衛氏を見舞う」、日本山岳會越後支部『越後山岳第四号』日本山岳會越後支部, 1955, p. 9-10 (榎田野線引)。

であつた。(略) 去年⁶⁵五月一日越後小出山の會の駒の小屋開きに際し、(略) 高頭氏夫妻も會員金山淳二氏の介添えで臨席され、武田久吉老も参加され、両老十何年振りかの會合とのことであつた。(略) 三日⁶⁶の朝、村井米子氏と共に高頭氏のお宅に伺つた。(略) 三十年程前⁶⁷にお訪ねした時と村の様子は少しお変わりなく、多い樹木や田畑の間に農家が散見していた。(略) 私たちの往訪を小出で申し上げておいたので、御一家総出で御接待を賜つた。(略) お話はマナスル登山から、會の状況、さては懐旧談に移り、愛藏の画幅なども拝見して楽しんだ。(略)。

—會報一七三号一九五四・五一—

これは昭和二十八(一九五三)年五月三日、当時日本山岳會會長だつた榎有恒が高頭邸を訪問した際の記録である。文中で榎は、「三十年程前」に高頭邸を訪問した事実を語っている。「三十年程前」とは「大正十二(一九二三)年頃」であり、『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』が最初に発行される昭和二(一九二七)年六月二十日の、四年前のこととなる。つまり榎と高頭は、大正十二(一九二三)年頃には相當の間柄であるため、高頭仁兵衛が序文を著した『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』を、昭和二(一九二七)年八月に榎が秩父宮殿下を案内し日本アルプス登山を行った際、秩父宮殿下に『日本アルプス登山

⁶⁵ 掲載會報が一七三号(昭和二十九(一九五四)年五月)のため、「去年」とは、昭和二十八(一九五三)年を示す。

⁶⁶ 昭和二十八(一九五三)年五月三日。

⁶⁷ 昭和二十八(一九五三)年の「三十年程前」となるため、「三十年程前」とは「大正十二(一九二三)年頃」と考えられる。

案内記附歌集駒草』を献上するのは自然の成り行きといえる。

八・結び

(一)『日本アルプス登山案内記』の発行と人的交流

『日本アルプス登山案内記』が発行されるまでの経緯と、平野秀吉と高頭仁兵衛・大平晟・榎有恒の交流について論じたい。『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』発行に伴う平野秀吉と高頭仁兵衛・大平晟・榎有恒の交流関係における詳細は図9で示した。この図に伴って次のとおり論考を進める。

平野は「明治三十七年⁶⁸の富士登山を振り出しに終生、山に登り続けた」⁶⁹。平野は『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』の「経過時間記録」の中で、「私は明治四十一年⁷⁰七月に、白馬連峰の上でアルプス登山の洗禮を受けてから、大正十五年⁷¹まで十九年の間、一夏に二度出かけたことはあるが、一度企てぬことの無く登り續けて来た山嶽宗の信者であります」としている。アルバム帖『深山と三谷』を納めた桐箱「榮光帖」裏面のいわれによれば、大正十三（一九二四）年十月に、摂政殿下（後の昭和天皇）は平野らが登山時に撮影した山河の写真を台覧したことが記されている。平野は大正十三（一九二四）年には、日本アルプスに関して造詣が深かったことが推察される。また平野は日本アルプス登山で得た経験と山岳で詠んだ詩歌を山河の写真とともに、一つの形としてまとめたいと考えていた。

そこで平野は予てから親交があり、登山の名手である大平晟に相談する。大正十一（一九二二）年から十二（一九二三）年頃、平野は大平を介して高頭仁兵衛と知遇を得た。その後、平野は高頭仁兵衛宛の手紙を、少なくとも二回（大正十五（一九二六）年の秋、昭和二（一九二七）年一月以降）を出すのである。一回目は山岳歌集、後の「歌集駒草」の草稿を、二回目はアルプス登山案内記、後の『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』の草稿を添えており、二回目は『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』発行に当たつての序文の執筆依頼を行った。

昭和二（一九二七）年四月二十六日付で高頭仁兵衛は『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』の序文を著し、四カ月後の昭和二（一九二七）年六月二十一日に平野秀吉著『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』が発行するのである。発行から一カ月半後の昭和二（一九二七）年八月、秩父宮殿下が榎有恒を案内役として日本アルプスを登山した。この際、榎は高頭が序文を著した『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』を秩父宮殿下に献上したのである。

『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』はその後、昭和四（一九二九）年六月十五日に「歌集駒草」が切り離され『日本アルプス登山案内記』として発行され、二カ月半後の九月一日には版を重ね十版となる。昭和五（一九三〇）年五月十日には五年版の第一版を、昭和六（一九三二）年五月二十五日には六年版を、矢継ぎ早に発行している。

(二)『日本アルプス登山案内記』が重版された背景

『日本アルプス登山案内記』が重版された背景について考察を加える。「日本山岳会百年史年表」の「登山周辺事項と世界、国内の動き」

68 西暦一九〇四年。

69 前掲p.69。

70 西暦一九〇八年。

71 西暦一九二六年。

によれば⁷²、明治三十一（一八九八）年に第四高等学校北辰会（現、金沢大学）をはじめりとして、各学校（主に、旧制中学、旧制高等学校、旧制高等商業学校、旧制大学等）で山岳部、旅行部、スキー部が発足している。年ごとの発足数を示せば、明治三十一（一八九八）年が一団体、明治四十二（一九〇九）年が一団体、明治四十五年・大正元（一九一〇）年が二団体、大正二（一九一三）年が二団体、大正三（一九一四）年が二団体、大正四（一九一五）年が六団体、大正七（一九一八）年が二団体、大正八（一九一九）年が三団体、大正九（一九二〇）年が五団体、大正十（一九二一）年が二団体、大正十一（一九二二）年が二団体、大正十二（一九二三）年が六団体、大正十三（一九二四）年が二団体、大正十四（一九二五）年が三団体、大正十五・昭和元（一九二六）年が二団体、昭和二（一九二七）年が二団体、昭和四（一九二九）年が一団体となり、それ以後、昭和十四（一九二九）年までの間に発足した団体を確認することができなかつた。これらの事実から、『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』が発行した昭和二（一九二七）年頃には、多くの学校（主に、旧制中学、旧制高等学校、旧制高等商業学校、旧制大学等）で山岳部、旅行部、スキー部が発足していたといつてよい。したがって、『日本アルプス登山案内記』が重版される昭和四（一九二九）年から昭和六（一九三二）年の頃には、多くの学校の山岳部、旅行部、スキー部で、『日本アルプス登山案内記』が日本アルプス登山に欠かせない本として活用され、需要が高まったことが推察される。

⁷² 日本山岳会百年史編纂委員会『日本山岳会百年史（続編・資料編）』日本山岳会、2007、p.A21。

（三） アルバム帖『深山と三谷』掲載写真の『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』および『日本アルプス登山案内記』への転載について

昭和二（一九二七）年六月二十一日発行の『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』と昭和四（一九二九）年六月十五日発行の『日本アルプス登山案内記』の文章構成について比較してみたい（表2）。『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』は「歌集駒草」の記載がみられるが、『日本アルプス登山案内記』は「歌集駒草」の記載はない（表2）。『日本アルプス登山案内記』として、昭和四（一九二九）年六月十五日に発行される前の、昭和三（一九二八）年十月二十日に「歌集駒草」を『山嶽歌集駒くさ』⁷³として発行している。そのため昭和四（一九二九）年の『日本アルプス登山案内記』は『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』の本文を使用して再版したのである。地図については、両者とも同じものを使用している（表2）。写真について、両者は題名が異なり、まったく別のものを使用していることが明らかとなった（表2）。掲載写真についての論考を続けたい。

昭和二（一九二七）年六月二十一日発行の『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』と昭和四（一九二九）年六月十五日発行の『日本アルプス登山案内記』の掲載写真が、アルバム帖『深山と三谷』で掲載されている写真が転載されているかどうかを確認してみたい（表3、4）。『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』に掲載された写真十八点のうち七点がアルバム帖『深山と三谷』に掲載された写真と同一であることが明らかとなった（表3）。『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』

⁷³ 平野秀吉『山嶽歌集駒くさ』斯文書院、1928、146p。

に掲載された写真のうち、アルバム帖『深山と三谷』と同じ写真を用いているものの題名が異なる写真が三点見受けられた(表3)。したがって『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』とアルバム帖『深山と三谷』の掲載写真の一致率は三十九%となり、『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』に掲載された写真の四割弱がアルバム帖『深山と三谷』からの転載されていることが明らかとなった。これに対して、『日本アルプス登山案内記』の掲載写真二十一点のうち、アルバム帖『深山と三谷』から転載されたと考えられる写真は一点も見つけることができなかつた(表4)。

以上をまとめると、『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』に掲載された写真の四割弱がアルバム帖『深山と三谷』から転載されているのに対し、『日本アルプス登山案内記』に掲載された写真の、アルバム帖『深山と三谷』からの転載は皆無となった。掲載写真については、アルバム帖『深山と三谷』と、昭和二(一九二七)年六月二十一日発行の『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』との継続性が示され、『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』発行のきっかけがアルバム帖『深山と三谷』の写真にあることが暗示された。これに対して、アルバム帖『深山と三谷』と、昭和四(一九二九)年六月十五日発行の『日本アルプス登山案内記』との継続性を掲載写真の上から示すことができなかつた。すなわち、『日本アルプス登山案内記』の発行に際しては、新たな写真が用いられたことが明らかとなった。

(四) 総括

アルバム帖『深山と三谷』とアルバム帖を納めている桐箱「榮光帖」の調査から、平野秀吉が編纂し、摂政殿下(後の昭和天皇)が台覧し

た大正十三(一九二四)年十月頃には、平野は地方では名の知れた登山家であり、日本アルプスに造詣が深いことが知られていたと推察される。昭和二(一九二七)年六月二十一日発行の『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』は、平野の日本アルプスにおける登山経験と山岳で詠んだ詩歌を、アルバム帖『深山と三谷』に納めた山河の写真とともに出版することを目的として行われた。平野は発行に際し、知人大平晟を介して、高頭仁兵衛に序文を著してもらった。平野が高頭と知遇を得たことで、楨有恒にも『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』が知れるところとなり、楨と関係が深い秩父宮殿下に、楨が『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』を紹介したのである。各学校(主に、旧制中学、旧制高等学校、旧制高等商業学校、旧制大学等)の山岳部、旅行部、スキー部の活動が増すにつれて、『日本アルプス登山案内記』が重版され、結果的に平野の日本アルプス登山案内者としての業績を高める結果になったといえるのである。

九. 後記

最後に平野秀吉の登山観について触れてみたい。『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』自序の中で、平野は登山について、次のようにとらえている⁷⁴。

近代文藝の思潮に於て世界を風靡した、謂はゆる自然主義作家が、「眞」と云ふことを目標として、有りのままに現實を描くと云つた主張に異存はない。従つて無技巧無脚色で無ければならぬ、粉飾を

去れ、假装を脱せよと云ふ主張にも、必ずしも異存は言はぬ。(略) 覺者は、小我を棄てて自然に還れと教え給ふ。清澈玲瓏な大自然に還つて、人間自己の本質を見つめると云ふことは何と云ふ尊い態度であらう。此くして尤も偉大な自然は、海であり、山である。就中、崔嵬巍峩たる山嶽に於て、自然は最も神秘的な、静穩な、最も崇高森嚴な、瑰奇秀麗な姿を呈してゐる。御花畑を見よ、萬年雪を見よ、萬古斧鉞を入れぬ十里の原生林を見よ、全く浮世の塵一つも寄せつけぬ、あのサファ色の、コバルトブルーの、濃い紫紺色の大空に、美しいスカイラインを曳いてゐる、數十里の嶽尾根を見よ。此等の山脈を縦斷横斷して、十數日の間人ツ子の一人にも行逢はぬ、山の深さが到る處にある。(略) 唯々山に入る、何の成心も無く山に入る、其れのみで十分である。(略) 自己とか人間とかの意地をやめ、大自然と同化して、(略) 山に就いて此くの如く敬虔の信心をもつ私共は又、尤も偉大な大自然禮讚の文學が、尤も偉大な山嶽文學となつて著れて來て、其れが青年男女の為に、極めて健全な讀物の一つであるべき(略)。

平野によれば「覺者は、小我を棄てて自然に還れと教え給ふ。清澈玲瓏な大自然に還つて、人間自己の本質を見つめる」ことは「尊い態度」であるとして結んでゐる。こうした態度は「文化や道德などの人間的社会的諸現象の原因や法則あるいは規範を自然の概念によつて解釈し説明しようとする思考態度」(自然主義)⁷⁵といえよう。しかし平野が主張する「唯々山に入る、何の成心も無く山に入る」ことで「大自然

と同化」し「大自然禮讚の文學、山嶽文學」として昇華する営みとして捉える考え方は、「教育を自然現象に類推してその概念を説明したり、教育の目標、内容、方法について自然にモデルを求める考え方」(教育上の自然主義)⁷⁶とは異なる考え方である。また平野は「(略) 師範学校在職中も、全校生徒を妙高、米山、八海、浅間など數多くの山々へ引率したが、事故は一件もなかつた。秀吉にいわせれば、山の危険は、すべて、人間の心の不充実、不用意からおこるもので、山自体に危険は絶対ありえないことであつた。(略)」⁷⁷としているが、登山と通じて「教育の目標、内容、方法について自然にモデルを求める考え方」として「教育上の自然主義」を平野が教育活動に実践したと考えるには及ばないと解すべきである。

十. 謝辞

本研究は平野秀吉のご子息から「榮光帖」「深山と三谷」を調査する機会を与えていただいたことに端を発する。「榮光帖」および小原新三の短歌(俳句) 釈文は新潟県立長岡農業高等学校教諭金子達雄先生のご協力を頂いた。また明星大学准教授の廣嶋龍太郎先生には私の拙い文章を読み、懇切なるご教示を賜つた。この場を借りて厚くお礼申し上げます。

〈筆者・千九五九—〇四二二 新潟市西蒲区桑山三二六〉

⁷⁵ 細谷俊夫ら『新教育学大辞典第三卷』第一法規,1990,p.431。

⁷⁶ 同 ⁷⁵。

⁷⁷ 前掲6,p.71 (横田野線引)。



図1. 『深山と三谷』(1頁)



図2. 『深山と三谷』(2頁)



図3. 桐箱「榮光帖」(天板)

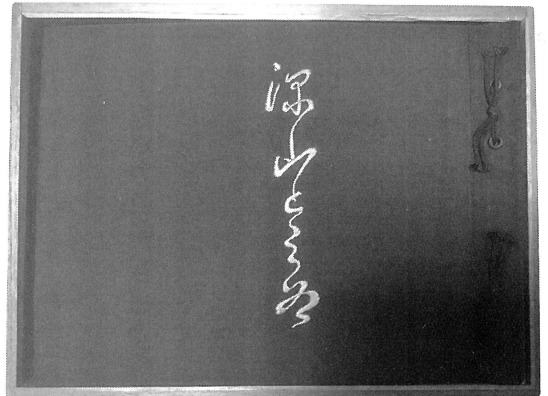


図4. アルバム帖『深山と三谷』(表紙)



図5. 桐箱「榮光帖」(天板裏面)

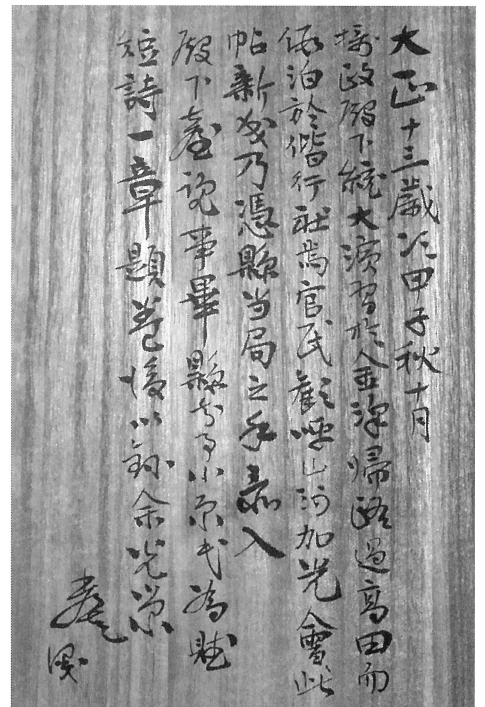


図6. 桐箱「榮光帖」(天板裏面) 拡大

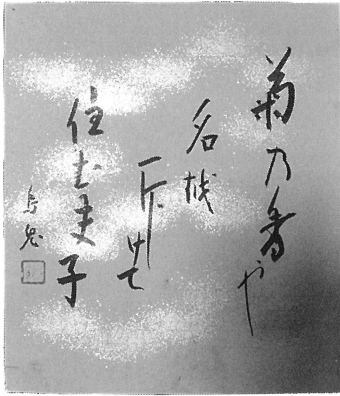


図7. 小原新三の短歌 21.0×18.0 (本紙)



図8. 小原新三の落款

図1～8は、令和元年7月21日(日) 榎田撮影。
同日サイズ計測。単位はcm。

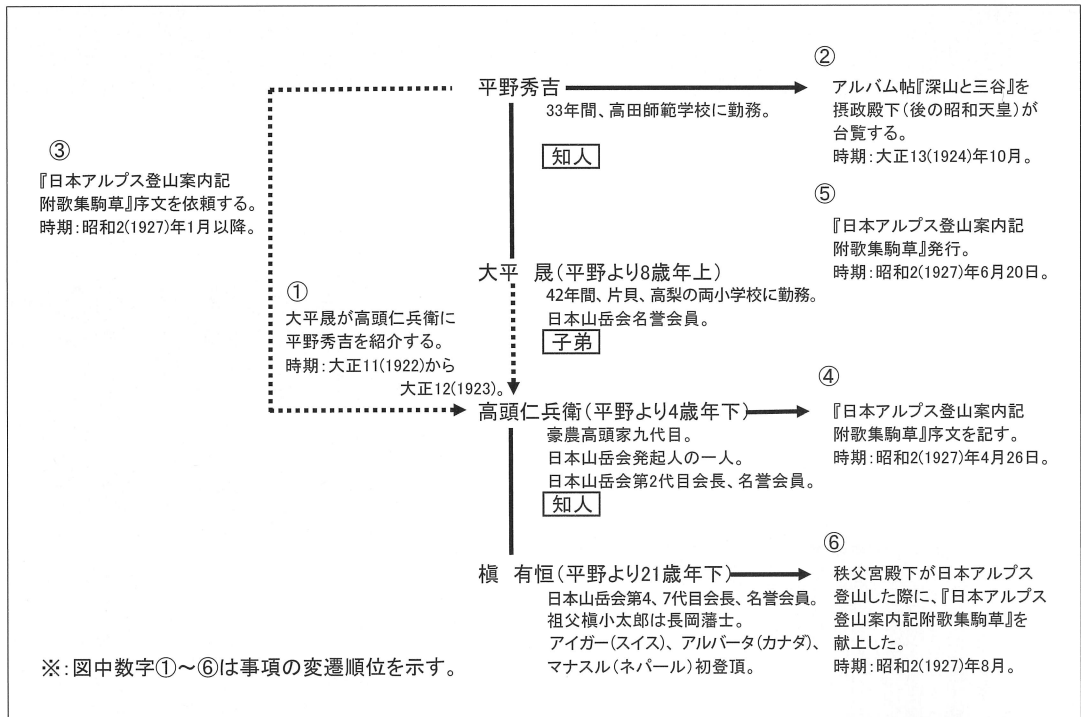


図9. 『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』発行に伴う平野秀吉と高頭仁兵衛・大平晟・榎有恒の交流関係図

表1 アルバム帖『深山と三谷』（大正13年10月）に記載されている写真の題名・撮影場所及び状況

題名	撮影場所及び状況	掲載写真※	頁
はれゆく霧	四つ大口村の裏みちより白馬連峰を仰ぐ	横	1
踊躍	大町の裏田甫より	横	2
高嶺の雲	白馬嶽上より小蓮華、大日嶽を	横	3
山色連天	白峰間嶽より北嶽への途中にて	横	4
逆光線	黒部峡谷 猿飛の奇勝の上にて	縦	5
枝もる日影	大町より針の木峠へ 大澤のどうの下にて	縦	6
休憩！休憩！	白馬への登り路 猿倉への下にて	縦	7
杖と鐵かんじき	針ノ木峠にて	縦	8
雲烟縹緲	大黒鑛山の下にて 立山連峰を見る	横	9
晝げ	鯉澤より奈良田に向ふ途中にて	横	10
美しさ雪の稜線	白馬嶽上より清水嶽を見る	横	11
下を見るな	大町より立山への途中 黒部谿流 籠渡	横	12
嶺近し	白馬大雪溪の上 葱平のお花畑の下にて	横	13
山の草	洲□□ □□	横	14
夕ばえの山	飛弾の平湯にて 笠嶽を見る	横	15
涌くがまゝ流るゝがまゝ	祖母谷の温泉	横	16
明日登る嶽	徳本峠 穂高を見上げて	横	17
咲きつゝく南京小櫻	白馬乗鞍嶽下 大池々畔の野営	横	18
喘ぎつゝ	白馬大雪溪のやゝ上部	横	19
をのゝく手わなゝく足	黒部谿谷の釣橋 祖母谷より鐘釣への途中	横	20
マッターホルン	薬師の一角より 槍が嶽を見る	横	21
すばらしい背景	徳本峠の上にて	横	22
山口	二股橋をおりて 杓子嶽槍ヶ嶽を仰ぐ	縦	23
をねは白し	白馬大雪溪下の 河原にて	縦	24
疲れも忘れて	白馬嶽頂上の三角點	横	25
雲海嶽嶼	木曾駒ヶ嶽の頂上にて 遥かに南アルプスに対し	横	26
幽美	針の木嶺の下にて 黄化石楠花	縦	27
霽れさる心	浄土山より大日嶽に 見とるゝ一行	縦	28
大雪溪を見かへりて	針の木嶺の上に於ける一行	横	29
見上くる五色原	針ノ木峠より黒部へ 南澤のどうに下	横	30
飛龍直下三千尺	立山々中 稱名瀧	縦	31
大なる自然を小さき人	白馬大雪溪の中程にて	縦	32
天翔ける	霧の霽れまを待ちて 三國の界から白馬嶽を	横	33
嶽の色雪の色	白馬嶽下葱平 お花畑より杓子嶽を	横	34
斜線稜線	小蓮華嶽より大日嶽を	横	35
霧氷	劍嶽を目ざしつつ	横	36
日は正に午	黒部峡谷 鐘釣のつり橋	横	37
八月の冬	白馬天狗小屋場 野榮	横	38
平蜘蛛のごとく	日本アルプスの大劍峻 劍嶽の難場	縦	39
命の麻繩	劍嶽の劍峻をロープに すがり下る一行	横	40
右千仞の谷	黒部峡谷 猿飛の附近にて	縦	41
南畫北畫	黒部谿谷 祖母谷より本流合流点の下	縦	42
穂高連峰	上高地大正池の畔にて	横	43
澄澈	早川に別れて廣河内の谿谷に入る（白峰へ）	横	44
枯木も山のにぎはひ	大黒鑛山附近の 荒廃せる山相	縦	45
紫の峰白銀の峰	仙丈嶽下野呂川溪谷より 北澤に入りて甲斐駒嶽を見る	縦	46
神工鬼斧	木曾寢覺の床	横	47
白皚皚	立山ザラ峠の下にて	横	48
カメラとカメラ	白馬嶽下 大雪溪の中程	縦	49
岩より岩へ	浄土山より立山雄山へ	縦	50
白樺の林	立山の峡谷中にて	横	51
お山は快晴 六根清浄	木曾駒ヶ嶽御料林中の梅林（六合目）	横	52
料紙一枚（菊の香や、烏兎）			53

※：掲載写真のサイズについて、縦の場合、タテ16.0cm×ヨコ11.3cmとなり、横の場合、タテ11.3cm×ヨコ16.0cmであった。

表2 『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』と『日本アルプス登山案内記』の文章構成における比較

『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』(昭和2年6月20日発行)	
目次	頁
日本アルプス登山案内記	1
日本北アルプス	4
白馬嶽方面	6
五龍嶽・鹿島嶽ヶ嶽方面	20
立山方面	21
薬師嶽方面へ	35
槍ヶ嶽・烏帽子嶽方面	41
針の木峠から烏帽子嶽へ	55
槍ヶ嶽・穂高嶽方面	59
常念山脈	76
乗鞍嶽・御嶽方面	83
日本中央アルプス	97
木曾駒ヶ嶽	97
日本南アルプス	103
総説	103
赤石嶽方面	109
鬼嶽・聖嶽方面	120
鬼嶽及び聖嶽以南	124
隠見嶽	125
仙丈嶽	129
白峰連峰	132
甲斐駒山脈	140
通過時間記録	147
白馬連峰から黒澤峽谷へ	148
後立山山脈縦走	149
針の木峠から立山・御嶽へ	150
針の木越え・立山・御嶽から白馬嶽へ	150
針の木峠から五色ヶ原・薬師嶽・槍ヶ嶽への縦走	152
針の木峠から御嶽・薬師嶽・槍ヶ嶽へ	153
早月谷から御嶽へ	155
御嶽生活	156
立山・御嶽から東澤へ	159
御嶽から白馬嶽へ	160
針の木峠から御嶽・薬師嶽・槍ヶ嶽・穂高嶽へ	160
烏帽子嶽から槍ヶ嶽への縦走	162
笠ヶ嶽縦走	163
笠ヶ嶽から槍ヶ嶽・穂高嶽への縦走	164
穂高嶽・槍ヶ嶽縦走	165
槍ヶ嶽から立山・御嶽への縦走	165
穂高連峰縦走	166
常念山脈から槍ヶ嶽・笠ヶ嶽への縦走	167
常念山脈から槍ヶ嶽の縦走	170
木曾駒ヶ嶽	171
悪澤嶽から赤石嶽への縦走	171
隠見嶽から赤石嶽への縦走	173
白峰連峰から赤石連峰への縦走	174
白峰連峰縦走	175
白峰・仙丈ヶ嶽・甲斐駒ヶ嶽縦走	176
甲斐駒ヶ嶽・仙丈ヶ嶽から地蔵ヶ嶽・鳳凰山への縦走	177
甲斐駒ヶ嶽	178
附録	
登山者の爲に	179
計畫	183
行動	183
準備	187
食料	191
衛生	193
設置	195
遭難	198
歌集 駒草	
駒草をよめる(長1)	203
何故に(短43)	206
蓮華なな湯(短62)	221
雷鳥をよめる(長1)	242
空のいろ(短32)	247
穂高嶽をよめる(長1短1)	258
槍ヶ嶽に登りてよめる(長1短1)	261
黒き魔王(短47)	266
雙六嶽上にて喉をよめる(長1)	282
赤もの赤實(短46)	287
五色ヶ原をよめる(長1短2)	303
雪鳥がた(短51)	307
夏雪草(短53)	326
透間山に登りて(長1短2)	344
附圖	
(1) 白馬嶽及び立山方面	
(2) 槍ヶ嶽・穂高嶽方面及び常念山脈	
(3) 木曾駒ヶ嶽及び乗鞍嶽・御嶽方面	
(4) 南アルプス地方	
挿入寫眞	
第一集	
踊躍 大町裏	
山色天に連なる 白峰北嶽にて富士を	
エーデルワイス 木曾駒ヶ嶽にて	
雲海嶺嶺 東嶽にて	
嚴冬八月 天狗嶽の小屋場	
スカイライン 穂高嶽より槍ヶ嶽を	
第二集	
峽谷の危険 黒部谷にて	
萬年雪 針の木雪渓	
王者のをごり 槍ヶ嶽の上にて	
雷鳥	
天ぞとる 槍ヶ嶽を	
白樺 上高地にて	
第三集	
雪の斜線 杓子嶽を	
黒尾根 穂高連峰を	
小葉のつめ草	
逆光線 洞澤にて	
かける日照る日 前穂高嶽を	
歌徳び 五色原頭の蒼蒼	

『日本アルプス登山案内記』(昭和4年6月15日発行)	
目次	頁
日本アルプス登山案内記	1
日本北アルプス	4
白馬嶽方面	6
五龍嶽・鹿島嶽ヶ嶽方面	20
立山方面	21
薬師嶽方面へ	35
槍ヶ嶽・烏帽子嶽方面	41
針の木峠から烏帽子嶽へ	55
槍ヶ嶽・穂高嶽方面	59
常念山脈	76
乗鞍嶽・御嶽方面	83
日本中央アルプス	97
木曾駒ヶ嶽	97
日本南アルプス	103
総説	103
赤石嶽方面	109
鬼嶽・聖嶽方面	120
鬼嶽及び聖嶽以南	124
隠見嶽	125
仙丈嶽	129
白峰連峰	132
甲斐駒山脈	140
通過時間記録	147
白馬連峰から黒澤峽谷へ	148
後立山山脈縦走	149
針の木峠から立山・御嶽へ	150
針の木越え・立山・御嶽から白馬嶽へ	150
針の木峠から五色ヶ原・薬師嶽・槍ヶ嶽への縦走	152
針の木峠から御嶽・薬師嶽・槍ヶ嶽へ	153
早月谷から御嶽へ	155
御嶽生活	156
立山・御嶽から東澤へ	159
御嶽から白馬嶽へ	160
針の木峠から御嶽・薬師嶽・槍ヶ嶽・穂高嶽へ	160
烏帽子嶽から槍ヶ嶽への縦走	162
笠ヶ嶽縦走	163
笠ヶ嶽から槍ヶ嶽・穂高嶽への縦走	164
穂高嶽・槍ヶ嶽縦走	165
槍ヶ嶽から立山・御嶽への縦走	165
穂高連峰縦走	166
常念山脈から槍ヶ嶽・笠ヶ嶽への縦走	167
常念山脈から槍ヶ嶽の縦走	170
木曾駒ヶ嶽	171
悪澤嶽から赤石嶽への縦走	171
隠見嶽から赤石嶽への縦走	173
白峰連峰から赤石連峰への縦走	174
白峰連峰縦走	175
白峰・仙丈ヶ嶽・甲斐駒ヶ嶽縦走	176
甲斐駒ヶ嶽・仙丈ヶ嶽から地蔵ヶ嶽・鳳凰山への縦走	177
甲斐駒ヶ嶽	178
附録	
登山者の爲に	179
計畫	183
行動	183
準備	187
食料	191
衛生	193
設置	195
遭難	198
地圖目次	頁
(1) 白馬嶽及び立山方面	5
(2) 槍ヶ嶽・穂高嶽方面及び常念山脈	59
(3) 木曾駒ヶ嶽及び乗鞍嶽・御嶽方面	97
(4) 南アルプス地方	103
寫眞目次	頁
徳本峠より見たる穂高岳	口繪
上高地河童橋より見たる焼岳	同
北日本アルプス八家のキレット	同
雲海	同
大正池枯木林	同
冷羊	同
雷鳥及び雷鳥の巣と卵	同
バイケイ草	同
白馬の大雪渓	7
立山連峰剣ヶ岳	23
剣ヶ岳のクレーンズ	23
初夏の五色ヶ原	27
焼岳より見たる笠ヶ岳・双六岳	49
針の木スバリ岳	57
烏帽子岳	57
穂高岳より見たる槍ヶ岳	61
焼岳より見たる槍ヶ岳	61
焼岳の噴煙	61
燕岳北岳	81
燕岳のバルコニー	81

引用文献
平野秀吉『日本アルプス登山案内記』斯文書院,1929,20p.

引用文献
平野秀吉『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』斯文書院,1927,348p.

表3 『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』掲載写真とアルバム帖『深山と三谷』掲載写真の比較

『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』（昭和2年6月20日発行）

アルバム帖『深山と三谷』（大正13年10月）

挿入写真
第一集
踊躍 大町裏
山色天に連なる 白峰北嶽にて富士を
エーデルワイス 木曾駒ヶ嶽にて
雲海嶽嶼 東嶽にて
嚴冬八月 天狗嶽の小屋場
スカイライン 穂高嶽より槍ヶ嶽を
第二集
峽谷の危険 黒部谷にて
万年雪 針の木雪溪
王者のをどり 槍ヶ嶽の上にて
雷鳥
天そゝる 槍ヶ嶽を
白樺 上高地にて
第三集
雪の斜線 杓子嶽を
嶽尾根 穂高連峰を
小葉のつめ草
逆光線 洞澤嶽にて
かげる日照る日 前穂高嶽を
歌偲び 五色原頭の著者

『深山と三谷』の掲載有無	『深山と三谷』の掲載名称
有	踊躍
有	山色天連
無	—
有	雲海嶽嶼
有	八月の冬
無	—
有	をのゝく手わなゝく足
有	杖と鐵かんじき
無	—
無	—
無	—
無	—
有	嶽の色雪の色
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—

引用文献

平野秀吉『日本アルプス登山案内記附歌集駒草』斯文書院,1927,348p.

表4 『日本アルプス登山案内記』掲載写真とアルバム帖『深山と三谷』掲載写真の比較

『日本アルプス登山案内記』（昭和4年6月15日発行）

アルバム帖『深山と三谷』（大正13年10月）

写真目次	
徳本峠より見たる穂高岳	口繪
上高地河童橋より見たる焼岳	同
北日本アルプス八峯のキレット	同
雲海	同
大正池枯木林	同
羚羊	同
雷鳥及び雷鳥の巣と卵	同
バイケイ草	同
白馬の大雪溪	7
立山連峰剣ヶ岳	23
剣ヶ岳のクレバース	23
初夏の五色ヶ原	27
焼岳より見たる笠岳・双六岳	49
針の木スバリ岳	57
烏帽子岳	57
穂高岳より見たる槍ヶ岳	61
燕岳より見たる槍ヶ岳	61
焼岳の噴煙	61
上高地のキャンプ	69
燕岳北岳	81
燕岳のバルコニー	81

『深山と三谷』の掲載有無	『深山と三谷』の掲載名称
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—
無	—

引用文献

平野秀吉『日本アルプス登山案内記』斯文書院,1929,201p.